英語の再帰用法と鏡像

メタデータ	言語: ja 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大木, 俊夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/179

浜松医科大学紀要　一般教育　第2号(1988)

英語の再帰用法と鏡像

大　木　俊　夫
(英　語)

Reflexives and Mirror Image

Toshio OKI
English

Abstract. This paper argues that what caused the morphological irregularities of the English reflexive pronoun in the 14th and 15th centuries was not limited to phonological and analogical reasons given in *The Oxford English Dictionary*. We assume that sociological and psychological reasons contributed to the adoption of the irregular forms. By the introduction of the concepts of 'self-possession' and 'mirror image', we attempt to explain the relationship between the irregular paradigm and the peculiar syntactical behavior of the English reflexive pronoun.
Key words. reflexives, reflexive pronoun, mirror image, self-possession

0. はじめに

英語の再帰用法には，ほかのヨーロッパ語には恐らく見出せないであろう特徴が少なくとも2つあるように思われる。その1つは，再帰代名詞のMorphologyのレベルの特徴[1]であり，他の1つは，統語法や意味と関わるものである。しかも，2つの特徴の間には，深い関連が存在するらしい。というのは，中期英語時代，これらの英語再帰用法の特徴が生じる際に，ある種のprincipleが働いたと推定されるからである。principleとは，self-possession(自己把握)の概念である。まずMorphologicalな特徴から検討することにする。

1．再帰代名詞のMORPHOLOGY

1.1. 初級者向きの英文法書にも必ず取り上げられているように，再帰代名詞のparadigmは，1，2人称においてmyself, ourselves; yourself, yourselvesのように人称代名詞の所有格に名詞selfが組み合わされている。一方，3人称のほうは，himself, themselvesの如く，女性単数形のherselfおよびitselfを除いて，いずれも代名詞の目的格にselfが付加された形態をとっている。英語の通時的な面に不案内な者には，1，2人称が本来の形態で，3人称が不規則になっていると見えるだろうが，事実はその逆である。それでは，現代英語においては，なぜ人称代名詞の目的格にselfを組み合わせた形が3人称にのみ残り，1，2人称では，目的格プラスselfが所有格プラスselfの形に変化したのであろうか。*Oxford English Dictionary*[2)]（以下OEDと略記する）はこの事情を以下のように説明している。

The transition from *meself* to *myself* was prob. due, partly to unstressing and obscuring of the vowel of *mē*, partly to the analogy of herself, in which *her* was felt as a possessive genetive.

要するに，myselfは（第2音節に強勢が置かれたため）meの母音が弱くなり，かつ曖昧化したこと，herselfのherが目的格でなく，所有格のherと感じられたことによる，というのである。

*OED*のこの説明は，1人称の単数形myselfには当てはまるであろうが，1人称複数形のourselves や 2人称のyourself, yourselvesについては適用できない。このことは，thyselfについても同様である。要するに，母音変化をよりどころにしては，一貫した説明が出来ないのである。仮に，これらすべての変化を，*OED*が述べているようにherselfからの類推と考えてみよう。問題は，herselfのherを当時の人々に所有格と解釈させた要因が何であったかということである。ここに，冒頭でのべたself-possessionの原理が働いたと考えられる。このことに関しては，後ほどもう一度触れる。その前に再帰代名詞の大半が，何時頃人称代名詞の目的格プラスself（正確にいえば，下記の*OED*の例が示すように人称代名詞と名詞のselfが同格の形で併置された）の形態から，所有格プラスselfの形に姿を変えていったのか，おおよその時期を調べてみよう。

1.2. ここで*OED*に再び登場してもらおう。同書によればmyselfの形が初めて現れるのが1400年頃である。さらに，ourselvesの形態については，非常に興味のある記述がある。ME.においてus selvenであったものが14世紀になると，北部の地域ではur selven,中部地域ではour selfeに地位を譲り，1500年までに，既にour selvesが登場して標準形になっていた。また，いわゆるroyal 'we', editorial 'we'と呼ばれている用法の再帰形であるourselfの初例は，1400-50となっており，thyselfの方は，1340-70となっている。

以上の例から推測すると，再帰代名詞の1，2人称の形態が人称代名詞の目的格の後にselfを付加した形から，所有格の後にselfを付ける形態に移行していったのは，おおまかに言って，１４世紀中葉から１６世紀初頭までのおおよそ１５０年間ということになる。それでは，問題の１５０年間に，こうした再帰代名詞の変化（当時の英国の言語状況から見てさらに正確に言えば，再帰代

名詞の変化というより形態の選択というべきであろう)に関して,所有格を選ばせるような意識の変化が英国人の心の中に何か起こったのであろうか。

OED のmyselfの用例は,この点でsuggestiveである。

I. EMPHATIC USES:

1. In apposition with the subject-pronoun *I* : In my own person; for my part c.1400 He schalle not trowe it lightly; and truely, no more did I my self, til I saughe it.

II. REFLEXIVE USE:

1484 Caxton *Fables of Aesop* By cause that I fayned my self to be a medycyn.

1.3.　2番目の用例のCaxtonは,言うまでもなくWilliam Caxtonのことである。当時ヨーロッパの羊毛交易の中心地であったフランドル(Flanders)のブルージュ(Bruges)に出かけ反物商人として成功したCaxtonは,その後2年間のケルン(Cologne)滞在中に,当時のフランスの人気ロマンス *Le recueil des histories de troye* を *Recuyell of the Historyes of Troye* と題してその英訳を完成し,読者の需要に答えるためにグーテンベルグが発明して間もない印刷術を習得してBrugesに戻り,1475年に同書を出版,1477年にはロンドンにおいて印刷工場を開設した。上述用例の7年前のことである。彼は69年の生涯の内に,99の作品を印刷し,そのほとんどを自ら編集した。ラテン語,フランス語,オランダ語などから彼自身が翻訳したものが25編あった。Caxtonの目標は,約1世紀前にChaucerが英語韻文において果たした役割を,散文において果たすことであったが,この目標とは別に,本人がそれほど予測しなかったであろう社会的影響があった(このことは,恐らくGutenbergについても言えることであろう)。それは,読書という知的趣味をより多くの人に提供することにより,彼等の精神を拡大し,開放したことであった。ギリシャ語,ラテン語に対する英語上層階級の知的好奇心は大陸の出版者によって既に満たされて居り,Caxtonのパトロンになったのもこの階級の人が多かったが,彼の出版物を読んだのは,こうした人に限らず,文字を読むことの出来るあらゆる階級の人を含んでいた[(2)]。読書の趣味は行動半径がごく限られていた民衆に未知の世界の情報を提供したばかりでなく,Caxtonの印刷した書物に含まれていた宗教書を読むことで,それまで教会に出かけて,司祭の口からのみ知ることのできたキリストや聖人の生涯に纏わる話を,神と信徒との間の仲介者である司祭を通さずとも,読書によって知り得るようになったと考えられる。これは民衆の精神生活にまで及んでいた中世教会の支配権を衰退させる1因となったはずであり,その結果,神と個人との対話がさらに深まったであろう。もっとも,中世英国の教会に対する批判的姿勢は,これより約1世紀前の聖書翻訳の先駆者John Wycliffに遡るが,彼の運動は民衆の支持を得るまでにはいたらなかった。CaxtonがWycliffと同時代に生まれていても事態に少しの変化も見られなかったであろうか。いずれにしても,Caxtonの仕事が,民衆の個の把握,確立の意識を強めたことは間違いないであろう。

1.4.　自己の把握は,自称及び対称においてそれぞれの所有格にselfを付ける形を普及させたに違いない。この推測を正当化する興味深い動詞がある。behaveがそれである。*OED*によると,

behave: Formed, approaximately in the 15th century from Be−2+Have *v.*, in order to express a qualified sense of *have,* particularly in the reflexive 'to have or bear oneself(in a specified way)'.

とあり，Caxtonの *Chesse* から採集された例が2番目に古い例として挙げられ，behaue hymself (＝behave himself)'のように再帰動詞として使われている。すなわち，この動詞は，(固有の仕方で)個を把握する意味を担うために，存在を表す動詞beと所有を表す動詞haveを組み合わせて15世紀頃作り出されたものである。[3] しかも，動詞behaveは，誕生した当初から再帰代名詞を目的語にとったらしい。これは，当時いかに自己の把握ということが民衆の意識の中にあったかを物語るものである。

小林秀雄は，「歴史と文学」の中で，

> いつの時代にも，その時代の思想を宰領し，思想界から多かれ少なかれ偶像視されてゐる言葉がある様です。仏といふ言葉だったこともあるし，神といふ言葉だったこともある。徳川時代では天といふ言葉がさうだったし，フランスの18世紀では理性といふ言葉がさうだった，といふ風なものでありますが，現代にさういふ風な言葉を求めると，それは歴史といふ言葉だろうと思われます。[4]

と述べているが，小林流に言えば，イギリスの14−15世紀においては，けだしself-possessionというのがそういう言葉であったろう。

1.5. 社会の権威が揺らぎ，個人の権利と自由の意識が芽生えたこの時代は，また動乱の時代でもあった。ここに詳述するまでもないが，[5]フランスとの百年戦争に於ける商人，手工業者，自由農民などの重要性，黒死病による労働力の不足などによって，イギリスはヨーロッパのいずれの国よりも逸早くその封建社会の殻を抜けだそうとして，過渡的な動乱の時期にあった。混乱は，社会制度上に限らなかった。「ノルマンの征服以来職人や農奴たちの言葉としていわば地下水となっていた」[6]英語が「再び自由な大気の下に現われ」[7]てから，せいぜい170−180年ほどしか経過していなかったこともあって，Caxton時代のイギリスには，まだ標準語が確立して居らず，方言の数は，county(州)の数ほど存在していた。すなわち，知的生活の面から見れば，言語的にも混乱していたのである。[8] こうした状況があったればこそ，民衆の共通した意識が再帰代名詞のような言語表現に反映したのである。このような社会状況をわが国に引き当てれば，国家意識に目覚め，海外の文化の吸収に努め，輸入した新しい概念を表すために漢語による造語に苦心していた明治時代に，ある意味では，似ていると言えよう。[9]

1.6. 自己のidentity(独自性)の把握は，いかにして行なわれるであろうか。外見上のidentityの確認は，自己の姿を写し出すものに頼らざるをえない。この目的に使われる道具は，言うまでもなく鏡である。鏡の歴史は古く，ブロンズ製のものは，紀元前3000年にエジプトの女性が既に使っていたらしいが，ガラス製のものが現われるのは，14世紀に入ってからであり，Venetian glassの発明もあって，当時の人は，鏡に対して異常とも言える興味を抱いたらしい。ちなみに，Gutenberg

は，印刷術を考え出す直前に(1438年頃)，彼の協力者たちに鏡製造の新しい技術を教えていたようである[10]。鏡は，自らの目では直接確認(identify)することの出来ない自己の姿を，ありのままに見せてくれる。少なくとも，自己の外面的なidentityを知るには，鏡が必要であった。鏡は，比喩的な意味にも使われ，Chaucerは，a myrrour of his mynde(c 1374)[11]という使い方をしているし，Caxtonが印刷した書物にもThe myrrour of the World (1481)[12]という挿絵入りの本がある。このようなmirrorの比喩的用法に，われわれは，当時の人々がいかに真の自己の姿を模索していたかを読みとることが出来る。

また，鏡は自己の外見を把握させてくれるだけでなく，自己の内面の対話にも役立つ。

> ところで，西洋文化がためらいなく鏡をうけいれた，鏡のなかの自己を直視する姿勢をもっている，ということは，すでにのべたように，ナルシシズムに関係すると同時に，いわゆる個人主義とも関係する。鏡のなかの自我との対面，ないし会話，それは，個人の内面的な対話の象徴である[13]。

1.7.　このような観点に立てば，再帰代名詞の中で，なぜ1人称，2人称に限って人称代名詞の所有格にselfを組み合わせた形態が選択されたのかを理解することが出来る。すなわち，鏡像に対して語りかける時に使われる人称は，われわれが自らに語りかける場合と同様に1人称と2人称を用いるからである[14]。日本語においても，自己に語りかける時には「おれは(私は)何をしようとしているのか。」「おまえは何をしようとしているのか分かっているのか。」などのように表現することは可能であろうが，主語を可能なかぎり省こうとする日本語においては，英語におけるほど自己に語りかける場合に使用する人称を意識することはない。英語圏の人々は，こうした場合に人称の選択を意識することがあるようである[15]。

2．再帰代名詞のSYNTAX

2.1.　再帰化(reflexivization)に関して，単文(simple sentence)中の同一指示的(co-referential)である名詞句の2番目の名詞句が再帰化される(1)のような「同節要素再帰化」への反例となるものに，いわゆる絵画名詞(picture noun)に関わる(5)，(7)のような再帰化がある。

(1) John saw himself in the mirror.

(2) John saw a picture of himself.

(3) John saw a picture of him. [John ≠ him]

(4) John recieved a request for an article about himself.

(5) *John ignored Mary's story about himself.

(6) The unflattering portrait of himself enraged the king.

(7) The President was annoyed that a portrait of himself was on sale.

(5)，(7)のような現象を統語規則によって説明しようとする種々の試みがなされてきた[16]。

これらの絵画名詞は,(8),(9)のように,それぞれに対応する動詞の有無によって2つのクラスに分類することが可能であるが[17] いずれのクラスの場合にもその意味的特徴は,自己のidentityが色,言語,など,表現の手段は異なっても,一種の鏡像として反射されたものと考えることが出来る。

(8) description, statement, composition, report, tale, claim, drawing, painting, etching, photograph, sketch, etc.

(9) story, column, satire, book, diary, letter, text, article, essay, sentence, paragraph, chapter, picture, etc.

要するに,(3)-(7)の文のpicture noun+of(about) oneselfの部分には,(1)が根底にあり,(1)のhimself in the mirrorの部分は,mirror image of himselfと考えることが出来,(2)-(7)の名詞句もその類型と言えよう。言い換えれば,絵画名詞がその後に目的を表す前置詞ofを従え,その目的語としてその上位の文の主語と同一指示的関係にある代名詞(同一指示的であればこの代名詞は再帰形となる)を伴う場合には,「人が自らを対称ないしは主題」として絵画,文章などを制作するということであり,NP_i+VP+NP_iの関係がその深層に存在すると思われる。日本語における,自我像,自叙伝といった表現と対応するであろう。

2.2. 絵画名詞には,さらにJackendoff(1972)が提示している(10),(11)のような特殊なものがある[18]。

(10) I hate the story about $\left\{\begin{array}{l}\text{*him}\\ \text{himself}\\ \text{me}\\ \text{*myself}\end{array}\right\}$ that John always tells.

(11) I told the story about $\left\{\begin{array}{l}\text{*him}\\ \text{*himself}\\ \text{*me}\\ \text{myself}\end{array}\right\}$ that Jhon likes to hear.

(10),(11)の文法性については,異なった判断もあるが,Jackendoffの判断が正しいとすれば,これらの例における単純代名詞と再帰代名詞の共起関係は,動詞の方向性の問題であり,主語が動作手主語(agent)であるのか,それとも被動作手主語(patient)であるのかということに関係がある。したがって,(10),(11)は,(12.b.),(13.b.)から明らかなように,(12.a.),(13.a.)において,省略(delete)されている補文の主語の代名詞が異なることも関係しているはずである。

(12.a.) I told Jim what to do.

(12.b.) I told Jim what *he* was to do.

(13.a.) I heard from Jim what to do.

(13.b.) I heard from Jim what *I* was to do.

この動詞の方向性，主語の動作手，被動作手の関係を，mirror imageの観点から論ずれば，絵画名詞となって実現されているmirrorに対して射像している人間名詞，すなわち絵画名詞となるものを制作している人間名詞と，これに文または文章中において意味的に関わる代名詞との文または文章中における関係の違いが，単純名詞と再帰代名詞の選択を左右している，ということになる。(10)においては，絵画名詞storyを制作しているのはJohnであるから，文中に現われる代名詞がJohnと同一指示的関係にある場合にはhimではなくhimselfになり，Johnと同一指示的関係を持たない代名詞が現われれば，meのように単純形が選ばれることになる。

2.3. Cantrall(1974)によれば[19]，(14)は聞き手がmantelの見える所にいる場合に使われ，(15)は聞き手にmantelが見えそうにない場合に使われるという。

(14) There is a picture of me on the mantel.

(15) There is a picture of myself on the mantel.

この場合も，(14)においては，鏡の役割をしているpictureが聞き手に見えるということになり，聞き手にとっての鏡像はyourselfであって，myselfではない。一方，(15)の場合は，鏡の役割を果たしているpictureは話し手だけに見えて，聞き手には見えないのであるから，話し手の鏡像であるmyselfがつかわれる。次の(16)，(17)も全く同様の説明が可能である。

(16) This is a picture of $\left\{\begin{array}{l}\text{you}\\ \text{??yourself}\\ \text{myself}\end{array}\right\}$ that I am looking at.

(17) This is a picture of $\left\{\begin{array}{l}\text{??you}\\ \text{yourself}\\ \text{me}\\ \text{??myself}\end{array}\right\}$ that you are looking at.

2.4. 鏡像を見ることは，ある意味で客体化された自己を見ることである。すでに，*1.7.* でみたように，我々は，いろんな状況において自己に語りかける(say to oneself)ことがある。日常これに似た経験をするのが，夢である。日常の次元では論理的に不可能な事柄が，夢の中では起こる可能性があるから，(18)のような文でも，「夢の中で」という風に「世界」を限定すれば，(19)のように容認され得る文になることは，何も不思議なことではない。興味をそそられるのは，再帰代名詞の関わる(20)-(21)のような文である[20]。

(18) *John bit his ear.

In his dream John bit his ear.

(20) *John$_i$ as seated behind $\left\{\begin{array}{l}\text{him}_i\\ \text{himself}\end{array}\right\}$.

(21) In his dream John1 was seated behind $\left\{\begin{array}{l}\text{*him}_i\\ \text{himself}\end{array}\right\}$.

(21)から明らかなように,「夢の中でジョンは自分の後に座っていた。」という文において,英語で許されるのは再帰形だけである。

すでに，大木(1974)[21]において引用した，G.Lakoff (1968)[22]に挙げられている(22),(23)の違いについても，(23)が夢の世界を語る場合によりふさわしい形であると言えよう。

(22) I imagined robbing the bank.

(23) I imagined myself robbing the bank.

Lakoffによれば,(22)は,参加者の読み(the participant reading)を持つのに対し(23)は傍観者の読み(the observer reading)を持つという。

また,次例(24)は,Sherwood Andersonの *Winesburg, Ohio*[23]に見られるものであるが,この場合も通常ならhimになるはずの代名詞が,himselfになっているのは,夢うつつの状態であるからである。

(24) In the bed the writer had a dream that was not a dream. As he grew somewhat sleepy but was still conscious, figures began to appear before his eyes. He imagined the young indescribable thing within *himself* was driving a long procession of figures before his eyes.

最後のsentenceに現れている再帰代名詞(within) himselfの先行詞は，1つ上位の文(主文)の主語Heであるから,通常は,(within) himとなるべきものである。

3．まとめ

再帰代名詞のsyntactical behaviorに関する近年の研究は,大きく分けると,次の二つになるであろう。ひとつは,Lees & Klima(1963)[19],Helke(1970)[20],Hasegawa(1978)[21]等による統語規則によるapproachであり,もうひとつは,Cantrall(1974),Kuno & Kaburaki(1977)[22]等の「視点」によるapproachである。本研究は後者に近いものであるが,さらに,mirror imageという概念を導入することによって,英語再帰代名詞の形態上の特徴と,その統語的特徴との関係を探ることが出来たと考える。

注

(1) 英語に最も近い言語の1つと言われるオランダ語の再帰代名詞では，1人称，2人称の人称代名詞の目的格にzelfを付けた形を使い，3人称には,zichという特殊な語にzelfを付け,zichzelfの形を使う。Faltz (1985)[1], p.50参照

(2) *Encyclopaedia Britanica*[3], Caxtonの項参照

(3) 古英語にbehabbanがあるが，*OED* によればbehaveとの歴史的関係はない。

(4) 新訂小林秀雄全集[4] 第7巻p.200

(5) 詳細については,G.M. Trevelyan, *English Social History*[5], Chap.III, England in the Age of Caxton

参照

(6) モロワ「英国史[6)]」p.193

(7) *loc. cit.*

(8) Pei(1952)[7)], pp.49-51; Jespersen(1956)[8)], sec.69; McCrum(1986)[9)], chap.II 等参照

(9) わが国のこうした事情については，例えば，柳父(1982)[10)]参照

(10) *Encyclopaedia Britanica,* Gutenbergの項参照。なお，現代でも，日本人の家に比べて，西洋人の家には鏡が多く備え付けられていることに驚くが，鏡の日欧比較については，加藤英俊(1971)[11)]を参照

(11) *OED,* mirrorの項参照

(12) *Encyclopaedia Britanica,*　*loc. cit.*

(13) 加藤秀俊*op. cit.* p.167

(14) 注(1)で述べたように，オランダ語の場合も，1，2人称は目的格＋zelfの形であり，3人称だけが，別の形を使っているのも，関連のあることと思われる。

(15) 筆者は，日本語では自分自身に語りかける時に，1人称，2人称のどちらを使うのか，あるアメリカ人から尋ねられた経験がある。

(16) 新英語学辞典[12)]，reflexivizationの項参照

(17) 新言語学辞典(改訂増補版)[13)]，picture nounの項によるが，Cantrall(1974)[14)]などによって，1部付け加えた。

(18) p.166[15)]

(19) p.94　なお，Cantrallはmantelをmantleと綴っているが，mantelの誤りであろう。

(20) Cantrall, *op.cit.* p.147

(21) 再帰代名詞に関する1考察[16)]. 紀要4号p.20

(22) Counterparts, or the Problem of Refernce in Transformational Grammar[17)]参照

(23) p.22[18)]

文献

1) Faltz, Leonard M.: *REFLEXIVIZATON: A Study in Universal Syntax.* New York: Garland, 1985

2) Murray, James A.H.et al.eds.: *THE OXFORD ENGLISH DICTIONARY.* Oxford University Press. 1970.

3) *ENCYCLOPAEDIA BRITANICA.* Chicxago: Encyclopaedia Britanica, Inc.1978.

4) 小林秀雄：新訂小林秀雄全集　第7巻　歴史と文学.新潮社, 1959.

5) Trevelyan, G.M.: *English Social History.* London: Longmans, 1961.

6) アンドレ・モロワ著.水野茂夫・小林正訳：　英国史.上巻　新潮社, 1959.

7) Pei, Mario: *The story of ENGLISH.* Connecticut: Fawcett, 1952.

8) Jespersen, Otto: Growth and Structure of the English Language. Oxford: Basil Blackwell, 1956.

9) McCrum, Robert et al.: *The Story of English.* London: Faber and Faber, 1986.

10) 柳父章: 翻訳語成立事情.岩波書店, 1982.

11) 加藤秀俊: 暮しの思想.中央公論社, 1971.

12) 大塚高信・中島文雄編: 新英語学辞典.研究社, 1982.

13) 安稔編: 新言語学辞典.改訂増補版.研究社, 1975.

14) Cantrall, William R.: *Viewpoint, Reflexives, and the Nature of Noun Phrases.* the Hague: Mouton, 1974.

15) Jackendoff, Ray S.: *Semantic Interpretation in Generative Grammar.* Cambridge, Mass: MIT Press, 1972.

16) 大木俊夫: 再帰代名詞に関する1考察.中部英語教育学会　紀要**4**号

17) Lakoff, George: Counterparts, or the Problem of Refernce in Transformational Grammar. Indiana: Indiana University Linguistcs Club, 1968.

18) Anderson, Sherwood: *Winesburg, Ohio.* Penguin Books, 1976.

19) Lees, R.B.& E.S.Klima: Rules for English Pronominalization. *Language* **39**, 17-28.

20) Helke, Michael: The Grammar of English Reflexives. Ph.D. dissertation. 1970.

21) 長谷川欣祐: 再帰形のシンタクス(1),(2).英語青年　**124**；315-17, 478-80.

22) Kuno, Susumu & Etsuko Kaburaki: Empathy and Syntax. *Linguistic Inquiry* **8**: 627-72, 1977.

(昭和63年1月29日受理)